法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-19

<紹介>村落社会研究会編：村落研究の成果と課題

今朝洞，重美

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
75
(発行年 / Year)
1956-05-01

中である。工業地域の北端にある港湾施設は現在、年間2〇万トンの小船を扱っているが、拡張後は更に5倍に増すであろうし、浚渫することによって中型の貨物船の入港も可能である。この工業地域西方地域は、住宅街、商店街として前企業の労働者3万を吸収する地域として発展するであろう。

なお筆者はワシントン大学地理学科助教授である。（1956.3.31）

村落社会研究会編：村落研究の成果と課題

1954 時潮社 260頁

今朝洞重美

本書は村落社会を共通の研究対象とする諸分野の学者が夫々の立場において村落研究の既往の業績を回顧批判して今後の課題のあるべき点を明かにしようと試みたもので、集落地理学の立場から編纂されたものではない。従って書評の形式も各章各節に亘る内容的紹介を逐一行う方法を止め、あえて筆者が地理学研究者に本書を推せんする所以のものを読後感の形で述べ、特に興味を抱いた1、2の項についての為附随的に簡単な紹介を試みる態度を取った。

さて我が国における集落地理学の研究は昭和10年前後を絶頂とし時代による流行の波はあるとしても、今日に到るまで常に地理学の中の中心的位置を占める事については一応認めても差支えはなかろう。かつて村松繁樹氏は「……集落はひとり地理学研究上の対象たるのみでなく、他の諸科学、例えば史学、経済学、社会学、農学等においても同じくこれを対象として研究している。従って地理学上集落をその研究の対象とする場合には地理学的な立場から地理学的な方法をもってなさるべきである。……」（岩波講座：集落 昭8）と指摘されたが、この地理学の立場から集落をどう取り上げるかについて従来諸家の見解を要約すると2つの立場で代表される。

第1は村松繁樹氏の云う「……集落なるものは地上に打立てられている以上その立っている土地や広く自然の特質によって制約を受け或はこれに応化している。かくの如くなれば集落なるものは人類と地球表面との間に存続する最も本質的な関係を包括しているのである。これ等諸現象と土地或は広く自然との関係の究明こそが集落地理学的研究の本質である。」（岩波講座：集落 昭8）とすなわち集落を環境論の立場から見ると云う立場、第2は鈴木栄太郎氏の「……今迄の地誌が取扱って来た地方の単位が大きすぎた感があったので

更に小さい単位の地方を詳細に考察する傾向を生じた。そのため小さい地方又は村の考察が急に盛んになつたのであつて、そのやうな意味に考えられるものが集落地理学なのである。云わば小地誌である。」（集落地理学、昭8）すなわち「集落地理学すなわち地誌である」とする立場である。

ところで先づ前者においては集落の立地と形態が研究の対象とされたが、また集落が歴史的産物であるためこれらを論ずる場合、単に決定論や景観論的方法だけでは満足できず、その発生の過程を通じて考察する歴史的方法が取り入れられその結果は米倉二郎氏の「……そして歴史と地理は新しき歴史地理学とも云うべき人文地理学として既に綜合され、集落地理学はその文科の中でも最も研究の進んだ部門で……。」の如き考えを生ずるに到った。最近出版された能登志雄氏の「集落の地理」（昭29）は集落の形態を景観論的方法で考察し、矢島仁吉氏の「武蔵野の集落」（昭28）は立地論の立場から、米倉二郎氏の「集落の歴史地理」（昭24）は歴史的観点から集落を考察したものである。

一方後者の立場では地誌が当該場所の個性を追求する学問であるため現象を如何ように取り上げ、また説明すればよいかが問題になり、これをめぐつて種々の議論や立場が主張されたが殊に最近従来の地誌のあみ方を羅列的なりとして立体的綜合的方法の必要が主張され始めた。そして対象の分野も更に加えて当該地域の社会構造、経済構造、社会経済史、民俗、行政さては応用土木、河川等等にまたがる諸分野のものを社会環境自然環境の要素と考え、これ等研究成果を綜合する事によって新しき地誌をあむ事が企図されてきたが、一方これ等の学問は夫々一応の専門分野を持つ独立科学である以上そのすべてに通じ、更に綜合する事は個人としてはほとんど不可能に近い事であるから諸所グループ研究、綜合研究の必要が唱えられたのである。ところで実際的には如何にして、また何を中心にこの綜合が行われるべきであるかは全く未解決のまゝのこされている状態であるが、とにかく必要な事はこれ等諸科学の対象、性質更に方法が地理学と如何なる点で異つているか十分に理解した上使用の方法を考えるべきである。

このような観点から今本書の組立を見ると第1章において最も地理学に関係の深い社会学、経済学、民俗学についてその理論と方法を要領よくまとめ、第2章では農山村について村落構造、家族、経済、教育、宗教、人口、政治と行政、法律、意識と世論、歴史、古代、中世、近世を、第3章で漁村について社会、経済、民俗の各項目について詳説しこれを本論となし、第4章は最近特に注目されて来た農村社会学の海外の動向について戦後のアメリカ

をとり、第5章では各分野における研究資料的小論を研究ノートの形で編集しその記述内容も一応上述の目的を充たすに好適のものと考える次第である。ついでに以上の諸要素を十二分に駆使し地誌の中に生かした好例として井上修次氏の「農村人口減少の実態並に農村生活点描—石川県山島村小誌—」(昭17.11)のある事を付け加えておく。

次に第1章にあげられた社会学、経済学、民俗学について各専門学者の見解および地理学との関係にふれておこう。我が国にアメリカ農村社会学の考えを導入した鈴木栄太郎氏は村落研究において地理歴史両方の人の考えにあきたらず社会学の方からこれを考えたが、農村性、生産形態、田作りの村と畑作りの村、社会成層の特性、人口構成の形態の5つを広義の機能に入れ、これに基ずいて村落の社会的特性を考えて ① 講中の村、② 産業組合の村、③ 農場村の3つに分類し社会学の立場からこれを考えた。花房野清一氏はこの場合、鈴木教授の提示された農村(村落)共同体理論の価値を高く評価された後、一方有賀喜左衛門氏、福武直氏の説を紹介し更に社会生活の内容を理解するに最も重要と考えられる同族団理論に対する成果について述べているが地理学への適応はほとんど未解決の状態である。つぎに経済学に就ては最近飯塚浩二氏が経済学および社会経済史的方法を地理学に導入すべき事を強調され、その著「人文地理学」に一応発表されているがその紹介および当否に就ては既に前号(第3号)において述べたので省略するが、大内力氏の結論を要約して飯塚教授説に対する再検討の資としたい。「資本主義の発達にともなう農村の諸関係の変質をあく迄追求し、それに依って農民なり地主なりの階級的性格がどのやうなものに発展していつているかを明かにする事が経済学的研究の終局課題である……此の場合村落と云う一つの単位は特別の対象とならず、又意味を持たない。」民俗学は柳田国男氏によって基礎が築かれたがこの成果を地理学に導き新生面を開かんとされたのは佐々木彰一郎氏であり、氏の著「村の人文地理」以下の労作にうかがう事が出来るが、その後さほど新しい進歩が見られないのは何故か。有賀喜左衛門氏がのべて居られる如く、「民俗学が全国的に諸習俗における個々の事実を出来るだけ多く採集して、これを集積して比較し、これにより発展過程の前後に整理してその相互関係を定める方法をとった。そしてその資料は断片的でも表面的でもよく又こゝでは村落という限られた小地域は初めから余り問題にしなかつたし、常民文化を研究の対象としながらもその研究資料採集の方法は資料と個々の村落生活との結びつきには深い関心を持たず又日本人全体を場にしてそれとの関係において各民俗を理解しようとする努力が欠けていた。」

換言すれば民俗学それ自体に根本的再検討の餘地があり、地理学がこれを十分利用する段階に迄到っていないと考える。

さて本書中の白眉であり古くから地理学研究者に関心の深い古代村落に対する中村吉治氏の所見を紹介しておこう。氏の「歴史古代―古代村落研究の現況―」は誠に聞くべき所が多い。衆知の如く古代村落についての研究には米倉二郎氏の労作「農村計画としての條里制―我国中古の村落と共耕地―」（地理論叢第一巻 昭7）「律令時代初期の村落―三十戸一里に統いて―」（同第二巻 昭8）の内容が定説化している今日、中村氏は先づ村落と家との不可分性を強調された後、古代の家、家族自体について内容性格に検討の必要ある事を指摘し、これらの集合体たる村落の有無に関する説を紹介し、ついで村落そのものゝ実態に対して律令制による郷戸、里、郷の制度の問題と謂所自然村落と云う考えについて概説した。そして結論において、「此の自然村落とは何をさすのか誰も説明していない。村が「自然」に出来ると云う自然とは何なのか、むしろ問題はその「自然」の解明になければならない。そしてまた「自然」に出来たにせよその村の構造性質又は機能こそが問題なのである。それを簡単にかたづけておいてさまざまな共同体とか制度を論ずるのはわかりにくい話だといってよい」、と指摘されたのはまさに核心をついた言葉である。誠に自然村落と云うからには当然非自然村落すなわち人工的計画的村落があるわけでその区別を明確にする事が古代村落研究の第一歩であろう。また氏は自然村落について、「民族や家族を一面的に血縁でかたづけて、その背後に村落を考えざるを得なくなって自然村落などと云う便宜的な言葉」で逃げてしまうのではなく民族や家族を村落の構成における血縁二同族と云うように考えて行く方法を最近活発になった古代村落遺跡の発掘研究の成果とも併せて所望されている。そして最後に中世村落や近世村落を考える場合にも概念的または「言葉」の上の時代区分と村落の実態の変化との間に大きな開きがあり村落自体どれ程政治的推移に影響されるものか決して過大視すべきものではない事を指摘されたのも公式的マルクス主義歴史観の最大の欠点をついた言葉であろう。とにかく村落の概念を明確にすると共に古代村落は其の後の変化と云う事を考える時その実態を把握する事の至難さを痛感する。

ついでに中村吉治氏の態度見解と著しい対象を示す永原慶二氏の「歴史中世」の中で中世村落に対する見解を一べつすると「……従来中世村落については現実の「村」が荘園制的支配によって分断され、人為的に編成され自然的な村落社会の展開を阻止していたが中世末期における荘園制の解体にともな

いはじめて本来の自然的な村が村としての機能を発揮できるようになりこれが「郷村制」としてとらえられるというふうに理解されていた。しかしこの様な問題よりも更に重要なことは複雑な半奴隷制的諸身分層をもつて構成されている中世の農民の生活の場としての村落は村落社会の構造、諸機能にこのような関係をいかなる形で投影し、その村落社会は如何なる性格をもつているかといつた問題であろう。」と社会経済史家の「村落」に対する観察態度がよく現われている。しかし我々に大事なことは中村氏も指摘されたように中世村落の実態すなわち古代村落とは内容的に類似のものか異質のものか、もし異質のものであればどのように内容的に異質のものであるか。なぜ異質のものでなければいけないのか。「中世村落」という言葉にとらわれずその実態について把握する事であろう。地理学者の労作としては米倉二郎氏「中世村落の様相—附円覚寺領尾張国富田庄高野山領紀伊国官省符庄—」（地理論叢第8巻昭11）の他、極めて少なく、実態はほとんど明かにされていない現状である。

最後に今一つ興味をそそるものとして鈴木栄太郎氏の「北海道だより」をあげておきたい。長い間鈴木教授の持論として胸裏にあつた課題は日本の農村は結局において米国のテーバンコミュニテイの方向に変容し、農村の田舎町えの依存度が更に大きくなるという事で北海道の農村の社会構造がアメリカのそれに最もよく似ているとの考えからこの事を追求することが渡道の一因ともなつたほどで、氏の「だより」は北海道内陸の農村地域には農民と農家はあるが内地でいう自然村（密居的村落をなす）はない。そして密居集落は非農業人口からなる田舎町で市街地と呼ばれているものだけである。」と北海道と内地の質の差を非常に大きく考えて居られる。はたして両者は教授の考えられるように本質的差異があるのであろうか。村落の成立年代の新旧という「時」を考慮に入れ更に深く村落の実態を検討する必要のある事を北大教授井上修次氏はかつて指摘して居られた事を思い出す。（1956.4.12）

木曽一木曽綜合農村調査報告書

青木　千枝子

本書は昨夏に行われた綜合調査のまとめとして発行されたものである。私自身調査の一員として参加しているので、紹介を書くにあたつて、いさゝか手前みそになるおそれがあつてはと、公平な立場からと思いつゝ筆をとる